歯科漂白 NEWS LETTER No. 9

DENTAL WHITENING

日本歯科漂白研究会

Japan Academy of Cosmetic Dentistry

2004. 9. 25

日本歯科漂白研究会の学会昇格と名称の変更について

日本歯科漂白研究会は2000年１月１日に設立されました。
研究会はその後順調に成長し、2004年９月１日現在正会員262名、法人会員17社を数える迄になりました。
研究会としては有数の規模になりそろそろ学会へ改組すべき時期が近づいたと言っていいでしょう。
昨2003年４月12～13日名古屋にて開催された学術総会にて研究会の英文名は“Japan Academy of Cosmetic Dentistry”に決定しました。同時に日本語の学会名について討議しましたが、日本歯科審美学会との兼ね合いもあり、まだ保留となっております。
次年度を目途に学会への組織変更と名称変更を行いたいと考えて居ります。
昨年全会員に対してアンケートを行いましたが、その結果の概要について報告いたします。
一番多かったのが、日本美容歯科学会で全体の約半数を占めました。
他にもいろいろありましたが、何故推するかについて会員からの投稿がありましたので併せて紹介いたします。
なお、いい提案がございましたら事務局迄お知らせ下さい。参考にさせていただきます。
寄せられた回答の中から次に代表的な意見を掲載いたしますので、お目通し下さい。

学会名の名称変更アンケート　　有効回答数　57名
実施時期　平成15年５月

和名	日本美容歯科学会（日本歯科美容学会・日本歯科コスメティック学会を含む）	42%
	日本歯科美白学会（日本美白歯科学会を含む）	12%
	日本歯科漂白学会	8％
	日本臨床審美歯科学会	5％
	会長一任	5％

その他、日本歯科臨床美容学会、日本歯科美療学会、日本歯科口腔美容学会、日本形成歯科学会、ＪＡＣＤなど１名回答が12件ありました。

改正案　日本美容歯科学会　Japan Academy of Cosmetic Dentistry

理由

う蝕や歯周病の予防が技術的に可能となった昨今、米国の歯科事情をみても今後の歯科医療は美容に関するものが大半を占めてくる。
“美容外科”が医学界ならびに一般に認知され、その医学的価値も広く一般に認識されている現在、同じ人体の一部としての歯科領域においても歯科審美学の概念を“美容歯科”として位置づけて、関連する他科との医学的な連携をとる時期にきている。

反対の論点は、おそらく以下の２つが占めていると推測する。
１つは“美容”という言語そのものへの偏見からくる抵抗感。つまり、ごく一部の「美容外科」ならびに「美容歯科」を標榜しているクリニックでの一部問題と認めざるをえない症例へのマスコミによる批判の残影からくるこの用語のマイナスイメージ。
もう１つは、そもそも日本歯科漂白研究会が日本審美歯科学会の対象領域である“漂白”に特化してスタートしたにもかかわらず“漂白周辺治療”への領域拡大に対する懸念。つまり、概念が同じものを“審美”と“美容”の２つの言語によって表現することで日本審美歯科学会の目的の一部である“審美歯科の普及を図ること”への障害が生じることへの危惧。

“美容”においては医療と美容院等の差別視したものの見方が一部存在するものの、その語意は一般用語として広く認識されていて、美容という言語の持つ語意に対する批判は一般には存在しない。
一方、“審美”はあくまでも審美歯科という専門用語として存在し、未だにその市民権を得たわけではなく、かつて芸能人と歯科医師の結婚報道時の審美歯科という用語の普及に加速を見たものの、やはり一部美容外科と同様の批判報道もされたためこの審美歯科という容疑に対してはマイナスイメージが同時に一部国民の間で認識されたのも事実である。
こうした事実を踏まえると、“美容歯科”と“審美歯科”の用語に対する偏見にはその差はまったくなく、美容歯科だけがマイナスイメージを負っている根拠にはなりえない。
さらに“美容”という言語は一般用語として広く認知され、さらにその語意はしっかりと認識されているが、“審美”という言語は未だに専門性が高く、認知はされてもその語意自体の認識にはいたっていない。
したがって、今後、本来の歯科審美学の概念の普及を目的とするなら“審美歯科”より“美容歯科”を使用するほうがはるかにわかりやすく、現実的かつ効率的であることは明白である。
また、他の一般に認識されていない、かつマイナスイメージのない無垢な言語や専門用語あるいは造語を適用する方がその普及において一見容易であるかのような錯覚に陥りがちであるが、学会レベルの組織ならびに経済規模でなしえることではなく、むやみに適用するとこれまでおこなってきた概念の普及の流れに停滞を引き起こしかねない。

名称の改正と同時に以下の点についても明確にする必要がある。

1、漂白の最大のメリットはMinimum Interventionであり、その最大の目的は美容である。周辺治療もダイレクトボンディングなどのＭＩの要素が高い治療を対象領域に順次取り込み、学会のもつビジョンと方向性を明確にする。
2、むやみに和製英語や新しい言葉を用いるのではなく、一般国民に対しより知名度の高いわかりやすい言語を用いた名称を用いてマーケットの育成に注力する。
3、既存の学会等の勢力に妥協することなく、新たな時代の歯科医療をリードするための新しいスタイルの学会であることを明確にし、問題とすべきマイナスイメージ等が発生した場合、学会は会員に代わって毅然として態度でそれを払拭していく。

以上、改正案提出における理由と、意見をまとめました。

会員；中原悦夫